

松盆栽の輸出拡大に向けた支援

■ 香川県盆栽生産振興協議会、高松盆栽輸出振興会 ■

（東讃農業改良普及センター 井口里香）

●対象の概要

高松市の盆栽栽培の歴史は古く、約200年前の文化年間に、瀬戸内の島に自生していた黒松等を鉢上げしたことから始まり、現在では松盆栽の全国シェアの約8割を占める全国屈指の盆栽産地を形成している。主な産地は市西部の鬼無地区と国分寺地区で、生産者数は201戸、栽培面積11.8 haである。

昭和57年には、県内の盆栽の生産振興を図るため香川県盆栽生産振興協議会が設立され、平成25年には、平成23年に開催されたアジア太平洋盆栽水石高松大会を契機に、「高松盆栽」が海外で高く評価されたことから、輸出の拡大とブランド化を推進するため、高松盆栽輸出振興会が設立された。同振興会は、平成26年の高松盆栽大会やジェトロ香川主催の盆栽輸出商談会において中心的な役割を担い、盆栽の輸出拡大に向けた地域の要として活動している。

●課題を取り上げた理由

1 センチュウ対策の検討

盆栽を輸出するためには、樹種や相手国により検疫条件が異なることから、それぞれに対応した取組が必要である。例えばEUではマツ属の輸入が禁止されているが、五葉松の盆栽は例外とされており、ビャクシンやヒノキ属でも盆栽は例外で、五葉松や真柏は多く輸出されている。輸出の要件としては、少なくとも2年間、植物防疫所に登録されたほ場で栽培され、50cm以上の棚上で管理されており、培地の検査を年6回以上受けていること等である。

こうした中、平成27年度に、EU諸国向けに登録されていたほ場の培地の検査で、植物寄生性のセンチュウが数カ所、一度に検出されたことから、早急に防除対策の確立が求められるようになった。

2 松盆栽の早期商品化技術の確立

平成27年に、国では、農産物の輸出拡大を目指してEUに黒松盆栽の輸出解禁を要請しており、県でもEUが侵入を警戒し、植物防疫上の課題となっている葉さび病とこぶ病について、当産地では発病しない根拠資料を作成する等、国と協力して取組んでいるところである。

盆栽の国内需要が低迷する中、産地の盆栽の6割を占める黒松の輸出解禁は販路拡大につながるものと期待されており、数年後の解禁を見越して、商品として早期に生産（増殖）できる技術の確立が求められている。



高松盆栽輸出振興会による輸出直前の薬剤処理と梱包作業

表-1 盆栽の輸出実績(神戸植物防疫所坂出支所の盆栽検査数量)

(単位:本)

	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年
出荷数量(計)	6,061	7,440	12,155	19,826	14,885	6,105	8,349	6,922
(台湾)	5,248	6,205	11,592	18,435	14,342	5,328	7,693	5,552
(米国)	197	784	320	421	191	50	330	552
(EU)	19	29	31	163	294	467	20	328
(その他)	597	422	212	807	58	260	306	490

●普及活動の経過

1 センチュウ対策の検討

平成27年度にセンチュウが検出された盆栽の栽培の経過を調査した結果、20～40年間養成地で栽培後鉢上げしたもので、生産者は掘上げ時の根傷みによる生育不良や枯死を心配し、できるだけ土を残して鉢上げしていたことが確認された。

また、対策を検討するうえで、まず、登録薬剤の効果と薬害の有無について確認する必要があることから、病害虫防除所と連携して調査を行った。

さらに、平成28年度には国産花きイノベーション推進事業を活用して、EU向け五葉松のセンチュウ対策の実証ほを設置し、以下のように、薬剤処理と根洗いを組み合わせた防除体系の確立に取り組んだ。

表一 実証ほで取り組んだ防除体系

養成地から鉢上げ時のセンチュウ対策（6月）
① 根洗い区、②薬剤処理区
鉢上げ2年目のセンチュウ対策（11月）
①根洗い区、②薬剤処理区、③根洗い+薬剤処理区
輸出直前のセンチュウ対策（1月）
①薬剤処理区

※薬剤処理区は異なる薬剤3剤を用いたため3区設定

通常、黒松は種子繁殖が一般的で、年数がかかるのが欠点である。このため、平成27年に優良系統の「瑞宝」を用いて挿し木による増殖に取り組んだが、発根率40～50%までが限界であった。そこで、さらに効率的かつ確実な方法として本年度は取り木による早期の商品化技術に向けての実証試験を行った。

●普及活動の成果

1 センチュウ対策の検討

6月の養成地から鉢上げ時の調査において使用した3剤のうち、ホスチアゼート液剤については、高温による影響と思われる古葉の褐変が確認された。11月の鉢上げ2年目と1月の輸出直前の調査においても同剤を使用したが見らかな薬害は確認されなかった。引き続き新芽の伸長についても確認することとしている。

薬剤の効果については、供試した盆栽のセンチュウの密度が低かったことから比較できなかつ

た。薬剤については、センチュウの種類によって登録薬剤が異なるため、3剤の登録薬剤を栽培期間中に処理するとともに、鉢上げ2年目には鉢上げ時に生育上、土を落とせなかった盆栽について根鉢の土を出来るだけ落とす作業を追加し、センチュウ防除対策に取り組む必要があると思われた。

2 松盆栽の早期商品化技術の確立

黒松盆栽を用いた取り木技術において①環状剥皮区と②針金巻き区（針金を幹に巻くことで形成層を遮断）の2区を設け、両区に発根促進剤を3パターンで処理し発根率を比較した。

その結果、環状剥皮区でラノリンペーストに発根促進剤を混和した区が発根率60%と高い結果になった。これにより、5ヵ月程度の短期間で1鉢から2本の盆栽を得ることができた。また、省力化を目的とした針金巻き区については全く発根しなかった。



取り木技術により得られた2本の盆栽

●今後の普及活動の課題

1 センチュウ対策の検討

これまでの調査結果については、会議等で生産者へ周知しているが、より対策の徹底を図るため、3剤による処理や根鉢の土を落とす作業の必要性等等について理解を深めてもらう必要がある。

また、センチュウ対策に取り組んでいる他県の事例等の情報収集に努め、比較的薬剤が効きにくい大型盆栽においても、より良い防除方法を検証していく必要がある。

2 松盆栽の早期商品化技術の確立

取り木については発根率をさらに高めるため、引き続き発根促進剤の種類等を検討する必要がある。

また、輸出の拡大に向け、マツ属だけでなく、比較的生長が早いビャクシン属の真柏等も活用しながら、早期の商品化に向けて安定した増殖技術を確立に取り組む必要がある。